遠野町は、
すなわち一郷の町場にして、
南部家一万石の城下なり
山奥には珍しき
繁華の地なり
その市の日は
馬千匹、人千人の
賑わしさなりき

『遠野物語』第1、2話より一部抜粋

特集

『遠野物語』
～110年前からの贈り物～

1910年(明治43)に誕生した日本民俗学の名著『遠野物語』が、2020年(令和2)6月14日、発刊110周年を迎えます。物語には、厳しい自然環境の中で命と向き合い自然と共に生きてきた遠野の人々の暮らし、歴史や文化などが記されています。明治、大正、昭和、平成、令和―。110年の時を刻んだ物語。社会が変化する中で、変わらない『遠野物語』の魅力。「遠野の宝」を探ります。

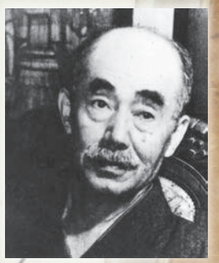
1_1912年(大正元年)の遠野町。写真手前は遠野中学校(現・遠野市民センター)　2_八幡祭りでにぎわう裏町(現・仲町)　3_大正時代の石町通り(現・穀町)。この他、物語が誕生した頃の貴重な資料を市立博物館で展示中(6月28日まで)　4_初版本『遠野物語』

『遠野物語』発刊に欠かせない「偉人」

昔話研究の先駆者
佐々木 喜善 Sasaki Kizen
1886年―1933年

西南閉伊郡栃内村(現遠野市土淵町)出身。文学を志し、早稲田大学に進学。民話採集、民俗資料収集に没頭する。日本のグリムとも呼ばれた。著書『江刺郡昔話』で「昔話」という言葉を日本で初めて使ったと言われている。土淵町山口に生家がある。

遠野の話を伝える →
← 『遠野物語』のやりとり



日本民俗学の父
柳田 國男 Yanagita Kunio
1875年―1962年

兵庫県神崎郡福崎町出身。東京帝国大学(現東京大学)卒業後、農商務省に入省。民俗学を世のため人のためになる経世済民の学問として探究。旅を思想の原点とし、全国の農村などを巡る。遠野には明治42年、大正9年、同15年の少なくとも3度訪れている。

先生と慕い遠野を学ぶ →
← 遠野の地勢や歴史紹介

台湾人類学の第一人者
伊能 嘉矩 Inou kanori
1867年―1925年

遠野町新屋敷(現遠野市東舘町)出身。明治28年、台湾総督府に勤務。日本統治時代の台湾で、約10年にわたり原住民を調査・研究。『台湾文化史』などをまとめ、台湾研究に大きく貢献した。柳田に先生と慕われ、帰郷後は『遠野物語』の成立にも影響を与えた。

発刊110周年を迎える『遠野物語』の誕生

本年6月14日、遠野に伝わる話をまとめた日本民俗学の名著『遠野物語』が発刊110周年を迎えます。現代に読み継がれる物語は、今も多くの人々を魅了し、遠野の旅へと誘い続けています。

『遠野物語』は、日本民俗学の父・柳田國男と本市出身で昔話研究の先駆者・佐々木喜善が出会い、誕生しました。「たくさんの民話を語る、東北出身の若者がいる」―。1908(明治41)年11月、喜善と同じ大学に通う学友で新進作家の水野葉舟が2人を引き合わせました。喜善は柳田に、天狗や河童、ザシキワラシ、山人など、遠野で聞き集めた不思議な話の数々を伝えました。柳田は、喜善の話を書き留め、1910(明治43)年6月14日、350部の初版本『遠野物語』を自費出版。民俗学の始まりを告げる金字塔と称される物語を完成させました。

目の前の出来事、110年前の遠野を記す

全119話の物語からは、厳しい自然環境の中で命と向き合い、自然や動物たちと共に生きてきた遠野の人々の暮らしぶりを知ることができます。

1909(明治42)年8月、柳田は実際に遠野を訪れています。かつて、遠野南部氏の城下町であり、沿岸と内陸の陸上交易でにぎわう町場の高善旅館に宿泊。馬に乗って村々を巡り、その風景や印象を『遠野物語』序文として鮮明に書き記しました。また、柳田は本市出身の伊能嘉矩を訪れ、遠野の地勢や歴史を聞き、物語をより現実へと近づけています。

柳田は序文で、「この書は現在の事実なり」と記しています。遠野の旅を通して、佐々木喜善が語った物語が単なる作り話ではなく、人々の暮らしそのものだと確信を深めたのでしょう。

現代に生きる物語の世界

『遠野物語』序文に記された風景。例えば、猿ヶ石川沿いに広がる豊かな田畑や多くの石碑、菅原神社の祭りとしし踊り、新盆の灯篭木は、今も残る風景のひとつ。『遠野物語』は現代の私たちにとっても「現在の事実」なのです。しかしそれらは、遠野の人々が災害や飢饉、疫病、戦争などの苦難の歴史を越えて、自然や歴史、文化を大切に受け継いできた先人たちの思いと努力の証でもあります。

そして、110年が経った物語には今なお、歴史を物語る新しい発見があります。東日本大震災の時には、『遠野物語』第99話の明治三陸津波の話が注目されました。また、本年は第68話に登場する、古代東北を支配した安倍氏の屋敷跡の近くで発掘調査が行われ、安倍氏伝説につながる、平安時代の水路跡や土器、鉄製品などの遺物が発見されています。

『遠野物語』は、珍しい宝物や新たな魅力がまだまだ地域に埋まっていることを私たちに教えてくれているのです。

上_安倍館遺跡(土淵町)での発掘調査

聞く、interview 遠野の宝

脈々と受け継がれる伝統や先人からの知恵。
郷土の文化を継ぎ、育む４人から話を聞きました。

伝統行事、食文化、昔の人の生きる知恵 知っている限りを伝えていきたい

「覚えでるごどを若げ人だぢに教えでいぐべし」そんな思いから会を結成しました。山口には、100年以上前からある水車小屋があります。現在は会のメンバーで米粉作りなどに使っています。少しの粉を作るのに、手間と長い時間がかかる。食べ物を粗末にしなかった先人の思いを感じています。水車の技術と知恵はきっと自然から学んだもの。昔の人たちの底力、すごいですよね。その血を継いでいるのが遠野の人。

受け継がれてきた食文化や暮らしの知恵、伝統などを平成26年秋からノートに記録しています。昨年には、遠野で頑張る若者たちの力を借りて『ここから見える物語』として本にできました。地域の伝統、行事、知恵など、私たちの知っている限りを、楽しみながら、若い世代につないでいけたらと思っています。

山口の水車小屋を活用して米粉作りをする女(おなご)だぢの会メンバー

山口女(おなご)だぢの会
新田 あつ子(こ)さん(75)
＝土淵町＝

語り部発祥の地「遠野」で 昔話を語っていく

語り部として駆け出しの頃、故・阿部ヤエさんから「話ずもんは、聞かせるもんでねんだじぇ。見せるもんだじぇ」と教えられました。その後に聞いた昔話は、本当に絵になって見えるようでした。しかも総天然色。語り部ってすごいな。おれもなるべ！ そう思った瞬間でした。

遠野は語り部発祥の地、全国の語り部の会の本家。日本中から昔話を聞きに来てくれます。「40年越しに夢が叶った」と涙を流す人もいました。人を惹きつけるのはきっと「懐かしさ」。遠い日のときめきが、親・祖父母の思い出と共によみがえるのでしょう。昔話は遠野の宝。本家の座に安住することなく、他の語り部団体と互いに高め合いながら、一人でも多くの人に遠野の昔話を聴いて、否、見ていただきたいと思っています。目標は「日本一の語り部の会」。

会員のみなさん。昔ばなしはインターネットサイト・YouTube でも視聴可能

遠野昔話語り部の会
堀切 初(はじめ)さん(69)
＝松崎町＝

子どもたちが帰ってこれる場所 無くしたくない、大切なもの

遠野物語という言葉が出ると必ず、「おらほのししだ」と話しになります。菅原神社の例祭では、「柳田國男が馬で菅原神社に来て、しし踊りを見でった」「そのどぎ、おらほのおやじだず踊ってらったずもや」と語り継がれています。

早池峯神社社門の幕を忠実に再現した獅子頭の白幕も誇りのひとつです。どこの郷土芸能団体もそれぞれ個性があって、自分の団体に誇りを持っている。無くしたくない思いは一緒だと思っています。小さな子からじじ、ばばも、みんなで一緒にできるのが郷土芸能の楽しみ。遠野まつりには、市外で暮らす子や孫たちが何も言わなくても参加しに帰ってきてくれます。それが嬉しい。住民も移住者も外国人も、みんなで一緒に楽しみながら、帰ってこれる場所を守っていきたいと思っています。

早池峯しし踊り
張山保存会　会長
糠森 長一(ちょういち)さん(65)
＝附馬牛町＝

『遠野物語』序文に登場する舞台、菅原神社で舞を奉納する張山保存会のしし

「民話」の原点は命の大切さ 先人たちの「思い」がつまっている

民話は、貧しくて読み書きができなかった民の話し。喜善は埋もれる民の話に光をあてなければならないと100年も前に言っています。

民話の原点は「命の大切さ」。『遠野物語』の河童、ザシキワラシ、オシラサマは、「命を守る」ことを教えています。河童は水を大切にすること、水の怖さを教えています。暮らしに欠かせない水。それを汚すなよ、怒らせるなよと。ザシキワラシは、作物も人もお天道様に当たらないと育たないぞと。オシラサマは、貧しい暮らしの中で、家を守っていくために犠牲になった子どもを神様にして手を合わせた。全部、子をあんじている。昔の人はいろいろな苦労をして次の時代につないできた。昔はそれしかできなかった。そういう先人の思いを知っていてほしいです。そうして、今の暮らしがあるのです。

かっぱ淵の守(まぶり)っ人(と)
二代目かっぱおじさん
運萬 治男(はるお)さん(71)
＝土淵町＝

伝承園にある運萬さんが大切にする喜善の言葉が記された石碑。

考える、『遠野物語』

河童やザシキワラシは知っているけど、『遠野物語』は読んだことがない。読んだことはあるけどよく分からない。師弟の間柄で『遠野物語』を勉強する2人に魅力や楽しみ方などを語ってもらいました。

富…富川さん
大…大橋さん

富 初めて物語を読んだときは10ページくらいで断念しました。1話1話が短くて、オチないやん！ そんな印象でした。文語体の表現も難しくて、しばらく本棚にしまっていました。

大 私は、日本の古典の源氏物語とか、そういった物語のような感覚があったんだけど、高校の頃本を開いてみたら、なんだ、遠野の話をまとめた本だと分かった。学問の対象となったのは、今は無くなってしまったけど、遠野常民大学（遠野物語研究所）の聴講生になってから。

富 地域おこし協力隊として移住した後、『遠野物語』をテーマに何かやってみたいと考えて。それならまず、大橋先生に会わないとだめだよと紹介してもらって。先生の話を聞いたらめちゃくちゃ面白くて。それから月1回程先生と会って、実際に物語の場所に連れていってもらううちに、頭というより体で面白みを感じました。物語の場所が今もあるんだということの面白み。原文と口語訳を見比べながら読んだら、もっと面白くなった。

物語の舞台を歩いて学ぶ

大 私は物語を教材にできないかという視点から入ったわけですが、当時の遠野のまちの生活、遠野盆地に生きる人々が何を考えながら生活していたのかというところに焦点をあてれば、非常におもしろく読めるのかなと気付いた。日本人の「精神史」とでもいうかな。物語の魅力はいろいろあるけど、富川くんも序文に惚れている。ロマン主義的な表現で、うら寂しいような。遠野の雰囲気をありありと感じさせる表現。序文の後半に2つの言葉がある。「これは目前の出来事なり」、もうひとつは「現在の事実なり」。柳田が「目の前で起きている本当の出来事を書き留めた本だよ」というのがこの物語の一つの魅力を作っていく。

実際に物語に登場する場所がある。登場人物も実名で出てくる。その話の起こった場所に行って確かめられるのが非常に大きな魅力なんだろうな。

富 物語を学ぶ醍醐味ってそこですね。車で少し行けば物語に出てくる場所がある。ありがたいことだなと。柳田が鼻息荒く序文を書いている。「願わくは此を語りて平地人を戦慄せしめよ」と。都会の人たちはこれを読んで戦慄せよと。東京から移住した自分が物語の扉を開いて、さまざまなものを見せてもらったときの興奮みたいなものがリンクして。こんなに面白い物語は都会の人に伝えないといけないなと、伝えれば楽しんでもらえるだろうと確信めいたものがありました。

大 何のために遠野物語を書いたかということで、献辞（けんじ）というものがある。「この書を外国にある人に呈（てい）す」と。これは、ある意味では明治時代の西洋文化一辺倒の日本に対するひとつの警告でもある。外国というのは、海外に行って西洋文化を学ぶ人たちと同時に、日本にいながら西洋文化の中で生活している都会人に呈する。ある意味では警告の書でもあるんだよね。

富 今の時代に置き換えるならば、テクノロジーとかAIとか。そういったものがどんどん進化していく中で、こぼれ落ちたものもあると思うんです。第6感みたいな、何か目に見えないものを感じるような。そういう意味では、今読むべきものでもあるんじゃないかと思います。

大 河童、ザシキワラシ、オシラサマとか、洗練された言葉であれば「精霊」。または、日常の生活の中から生まれてきた「民間信仰」。遠野で生きていた人がどういう交流を持って暮らしていたのか。「遠野人の精神史」につながっていくところが魅力のひとつになっていくんだよね。それともうひとつ。

富 山人ですね。柳田と同じように、山人とは何なのか考えてみると面白くて。当時は、山で鉄を採っていた人がいたので、その人たちだったんじゃないかとか。ひとつのテーマを基に、その裏側をどんどん紐解いていくと、地理的な要因だったり周辺の文化圏だったりが見えてくるのがすごく面白い。それと、山の神の話。大橋先生が言った民間信仰のような話の醍醐味って、身近な自然に対しての信仰とか、アニミズム的なものですよね。水の神、山の神は恵みも与えてくれる。だけど、時に命を奪うような二面性もあるから、きちんと向かい合い、信仰していたんだと分かるというのも面白い。

大 もうひとつ押さえておきたいのが動物と村人の関わり。生活を支えるために村人と動物が戦っている。物語の最後、119話目に「しし踊り」が書かれている。民間信仰的な精霊との関わりや、山人、山の神、動物など自然界との関わり。これがやっぱり、柳田が119話目に豊作を願い、魂の安らぎを願う「しし踊り」をもってきたひとつじゃないかな。遠野物語の魅力は、どんな考え方で生活していたのかということがよく分かるということ。一言でいえばそうなるんだべな。

大 それと、忘れてならないのは、物語は佐々木喜善が語った話ということ。『江刺郡昔話』の「はしがき」で喜善は、「広い日本の中には実際どんな珍しい宝玉が どんなに多く土の中に埋没されて居るか 其（そ）れを掘り起さねばならぬと思ひます」と言っている。土の中に日本の文化の一つである農民の魂が眠っていると。それは昔話とか一口で言えば民話なんでしょうけども、そういう話をどんどん発掘していかなければならない。この考え方が『遠野物語』の119話と、『遠野物語拾遺（しゅうい）』の299話という400以上の話の背景にあるんじゃないかな。そして、今を生きる私たちに必要なんじゃないかと思うんだよね。

富 そうですね。自分たちの近く、足元にあるということ。

大 あとは、なかなか原文が読みにくい、文語体で分かりにくいという人は、佐藤誠輔（せいすけ）先生が執筆された口語訳『遠野物語』からスタートしてみるのがいいんじゃないかな。あとは、1話2話でもいいから話の現場に行ってみる。

富 現場に行くと全然違いますからね。ここですね。最初から読まずともいいんじゃないかなとも思っていて。とりあえず舞台に行って、それぞれが感じたるままに物語を感じて、それから色々学んでみるのもいいんじゃないかなと思っています。自分の好きな物語がきっとあるはずなので。好きな話が1つでも2つでも見つかると、すごく楽しいですよね。

大 今言ったこと がすごく大事。自分で感じて、そこから、もっと深く入ってくる何かがあるというのを探していくのがね、一番いいことじゃないかな。

遠野の文化を生かした to know の活動は、ホームページやフェイスブックで見ることができます

遠野市市史編纂委員長
to know（トゥノー） 顧問
大橋 進（すすむ）さん
Ōhashi Susumu

◎ Profile/プロフィール
遠野市出身。40代前半から、遠野常民大学（遠野物語研究所）で本格的に『遠野物語』を学ぶ。元岩手県立高校教員（世界史）、元遠野物語研究所副所長。76歳。

㈱富川屋代表
to know（トゥノー） 代表
富川 岳（がく）さん
Tomikawa Gaku

◎ Profile/プロフィール
新潟県長岡市出身。移住後、地域プロデューサーとしてデザイン、商品開発、ツーリズムなどの企画を生業とする。遠野文化友の会副会長。33歳。

『遠野物語』に触れる

『遠野物語』を題材に、
市内ではさまざまな学習が行われています。
６月14日(日)の「遠野物語の日」を前に、
市内小学校で開かれた学習を紹介します。

写真／『遠野物語』を題材にしたカルタで、郷土の歴史を学ぶ土淵小児童

物語を生かした学び

「遠野物語のすごいところは、物語に書かれた場所、モノ、郷土芸能が今もあるということ。そして、伝えている人が今もいること」。子どもたちが真剣な表情でペンを走らせます。

５月19日、佐々木喜善の生誕地にある土淵小学校で『遠野物語』を学ぶ総合学習が開かれました。授業には、同校の６年生16人が参加。講師を務めた市文化課の前川さんの話に真剣な表情で聞き入り、郷土の歴史や文化に触れました。

同校は昨年の学習発表会で、喜善の幼少期から晩年を描いた劇「喜善伝」を披露。『遠野物語』を題材にした学習が行われています。その他にも市内では、小学生が昔話を語る「子ども語り部」や全校表現活動「遠野の里の物語」（遠野小）など、郷土を学ぶ学習が行われています。前川さんは、「大人になっても郷土芸能や芸術文化などの歴史、文化に触れることができる。遠野の間口の広さは大きな魅力」と口にします。

19日の授業の最後には、『遠野物語』を題材にしたカルタを使って学習。児童の元気な姿と歓声が広がりました。

●取材を終えて―

「わたしたちは、６月14日を「遠野物語の日」と定め、１００年の時を越えて今もなお光り輝くこの遠野の宝を長く後世に語り継いでいくことを宣言します」

遠野物語発刊１００周年を迎えた平成22年、「遠野物語の日」宣言として市内の小学生が読み上げた言葉です。

日本各地を旅した柳田國男は、次の言葉を残しています。「今まで見慣れて居る最も狭い周囲に於いてすらも、同じだけの興味と教訓が得られる」―。１１０年、読み語り継がれてきた物語。その舞台である遠野には、まだまだ多くの魅力が秘められているのかもしれません。まずは、自分の好きな物語を探しにページをめくってみましょう。そして、野に出て物語の世界に触れてみてはいかがでしょうか。あなたの感じたままに―。

● interview インタビュー

土淵小６年
似田貝 優大（ゆうだい）さん

伝統が続いてほしい、また勉強できるといいな

１年生のときに初めて『遠野物語』を見ました。『遠野物語』の話は110年以上も前のことなのに、今も物語や伝統が消えずに続いていることはすごいと思います。人は減ってきているけど、これからも伝統が続いていってほしいです。また勉強できる機会があればいいな。

伝承されていることの意味や価値を考えてみる

地域に伝承されていることの意味や価値を考えてみる時間を作ってみてほしいと思います。自分の近所を散歩してみるのもひとつの手段です。今まで気が付かなかったことが見えるかもしれません。発見と交流の繰り返しの中で、文化が続いていくのではないかと思っています。

市文化課副主幹
前川 さおり

『遠野物語』
～110年前からの贈り物～

近日公開！

「遠野物語110チャンネル」
プロジェクト短編講座番組

「クイズ 遠野ふしぎ再発見！」

『遠野物語』の舞台を巡り、集落の不思議に迫る番組「クイズ 遠野ふしぎ再発見！」を遠野テレビで放送します。放送１回目の舞台は、遠野物語発祥の地「土淵町山口集落」です。ふしぎ再発見の旅へ出かけましょう！

- **放送日**　６月13日(土)、14日(日)
- **放送時間**　10時～、15時～、19時半～
- **チャンネル**　遠野テレビ 11チャンネル
- **その他**　同番組は、遠野市教育文化振興財団の「YouTube」チャンネルから視聴することもできます
- **問い合わせ**　市文化課（☎62-2340内線335）

６月14日(日)は「遠野物語の日」

６月14日は遠野市立博物館を無料開放します。同日は、春季企画展「遠野物語が誕生した頃の遠野（６月28日(日)まで）」を開催中！ 明治後期から大正時代の遠野の写真や、喜善、伊能の日記、江戸時代の領内図などを展示しています。ぜひ、間近でご覧ください。